



草田男俳句に見る「老い」

奈良文夫

老いとは高齢による肉体的、精神的衰えのことであり、あるいはその意識のことであろう。人間の宿命であり、一般的にはつらく、哀しいことである。また俳句における老いとはどういうことであろうか。これも一般的には老齢化による創作力、連想力などの衰微などというのであろう。しかし、俳句という短詩型文学では一般社会、あるいは他の文芸ジャンルに比べても作家としての活動期間は長いし、また、俳句人口に占める高齢者の割合もはるかに高い。事実、八十を超え、九十を超えてなお第一線で創作に、執筆にばりばりと活動している人はちよつと数えただけでも大変な数になる。

●老いの価値

これに関連してここに格好の資料がある。それは昭和五十三年十一月号の「萬緑」三五〇号記念特集における平畑静塔と中村草田男の対談「老いの価値」である。静塔氏は、老いのプラス面について、老人の精神は微妙に

なり微妙なものを感じ、微妙なものを認識できるようになる。従って微妙な仕事ができるという。これが若い時にはなかった老いのプラス面であり特質、武器だという。そして精神科医らしく、老人には実体験を積み重ねたところの精神構造ができているので単なる情報、知識でなくリアルな体験による印象などがその精神構造の核になっていて、これらが現実の微妙なものと感応して還元される。感情が年と共に濃やかになって若い時には感じなかったことも感じとられるようになるのもこのためだという。さらにこういうことに生き甲斐を感じ、微妙なものを作り得る能力が加わっていくのだとも言っている。

この発言は、多分にその前年、夫人を亡くした七十七歳の草田男を励ます意図もあつてのことであろうが、肉体的な衰えやそれによる精神の視野の狭くなるのは自然の生理現象だから仕方ないが、その内的な精神構造はむ

しろ上質になる。年寄りがこのプラス面をしつかりと自覚しなくては駄目だという発言は、精神科医として現場の老人問題に直面している人の言だけに重みがある。たしかに今の高齢化社会、特に俳句界をみるとこのプラス面を生かして大活躍の超ベテラン作家が多いのもうなずける。

しかし、ここで面白く、興味があるのは、当の草田男がこの発言にはほとんど反応せず、むしろ、その発言の意図が自分を励ましてくれていたことはわかりつつ、理解できないらしいのである。たしかに青年期に神経衰弱の苦しみをのがれるために自然の風物に精神を集中することからはじめた俳句であるが、草田男にとってのそれは、その時代を含めた長い思想的遍歴の末にたどりついた自己表現の手段であり、生きている今のこの自分の、全生命をあげて詠うべき詩であつてみれば、静塔氏のいうことが、長い実作を経たうえの一種習慣的、手すさび的句作、その結果としてのすらりとした作品をさしているようにとれて理解できなかったのだらうと思う。この頃の作品をみよう。

向日葵突伏し密封大地を窺へる

口一つで蟻の総身喰下がれる

それぞれ七十五、七十九歳の折の句である。とても老人についていわれる枯淡だの、わび、さびだのには程遠

いものである。

もちろん、草田男にも老いを意識したような句が全くないわけではない。

二重虹末子に長く添ひゆかな

三十五歳という当時としては大変な晩婚であつたため第四女を得たのはすでに五十一歳の折で、この句はその二年後のもの。肉体的には健康であつたので、老いの意識は愛する者、庇護すべき者に対する父としての自分の年齢を考へる時に表れたようだ。かわいい盛りの子を見つつ、二十年後の自分を考へざるを得なかつたのである。

花菖蒲末女の父は死すべからず

後年、この子が二十歳を超え、そろそろ結婚適齢期の頃、こつも詠っている。

また、その頃、昭和四十五年六十九歳の折、NHKのラジオ「人生読本」の中で「永遠の青春性」についてこう語っている。「若き故の青春期が過ぎると、その後は自分自身が自覚して青春期というものを創り上げていかなければならない。実質的な青春期を持続させなければならぬ……」。それが真の詩人の務めだといっているのである。世にいわれる草田男の青春性、向日性が天性のものではなく、青春期そして六十歳の折の二度にわたる神経衰弱を克服して得られたものであるだけに強い響きをも

つ言葉である。

こうみてくると一つには長い思想的遍歴の末に得た自己表現の手段としての俳句、もう一つには肉体的には健康で後述する歩いて作る、そして歩いている、生きている今の自分の全生命をかけて作る俳句の故に、右のような愛する者を庇護するという意味での老いの意識のほかに、ある時期までほとんど世にいう老いの俳句は存在する余地がなかったといえそうである。もちろん最も愛してくれた祖母の死に起因もする青年期の異常な心理体験、その後の神経衰弱などを体験しているので人生無常の思いは草田男俳句の根底にあるが、それはここでは別にしておく。

●歩くことと句を作ること

そのある時期について、三女の中村弓子氏の『わが父・草田男』にこんなことが書かれている。「父にとつて『歩きに行く』とは『句を作りに行く』と同義語であった。句作と歩くことは常に一つのこと、自然の中を歩くことによって素材に出会うだけでなく、歩くことそのものが心身両面から句作に不可欠のコンディショニングを整えることになっていた」という。そして「しかし、七十歳の頃から歩くことが少くなり、七十五歳の時、ばたりと全く歩かなくなった」とつづけている。七十五歳とは、妻直子が亡くなる前年であり、ほぼ妻の死の年とみ

ていい。作品をみよう。

蟪蛄鉄疣に満ち相交る
蝸牛睡るいのちの膜の殻の口
犬の口から日の舌一枚春の薔薇
臥牛つぎつぎ起つ囀の久しさに

七十歳から七十五歳までの作品であり、少なくなったとはいえ、まだよく歩いて即ち草田男俳句を作っていた。第一句など『火の鳥』（昭和十四年刊）の頃の「玉虫交る」の一連を思わせて生命が躍動している。その他もまさに歩いてその生命のリズムが生み出した作品であることが如実である。

これだけの作品を生み出し得て、七十五歳とはいえ肉体的には健康だった草田男が、ばたりと歩かなくなったのはやはり直子夫人の死との関連以外考えられない。もちろん世に配偶者特に妻を亡くした男性の落ち込みのひどい例は多い。その一つとしてしまえば別だが、娘の結婚式の前日も句作りに出たまま夜になっても帰らず妻子を歎かせた草田男にそのままあてはまりそうにない。やはり弓子氏が前述の書の中でいうように、父の俳句は母あってこそ、母との合作とまで言っておられることに関係がある。また父についていわれる求道的というようなことが、母の死後、母の生き方、ものの考え方にあまりにあてはまることに驚いたとも言う。母の実人生の

吹き込むものを父が作品化していたのだというのである。

冷し蜂蜜老いづきつも吾に吾妻

七十二歳の折の句。年齢的には十二歳も若く、氣力に溢れていたこの妻がある限り、こう詠いつつも、世にいう老いの意識も、そして老いの俳句も、妻のその突然の死までなかったのはこのためである。

●草田男の老い

弓子氏は、この時期以降、歩かなくなった父の俳句の作り方は根本的に変ったと思う、より言葉そのものから出発するようになり、より心境的なものになったともいっている。即ち草田男俳句の老いは妻の死、そして歩かなくなった時をもってはじまり、かつ急速に進行したといわざるを得ない。

逝きたるなれ色鳥の首は動きづめ
をみなの魂たかく召されつ聖母の月
めぐりあひやその虹七色七代まで
当然のことながら亡き妻を追慕の句が並ぶ。そして、

山鳩来鳴きつぶやきに似る暮春かな
剃跡青き亡父現れ来よ夏料理
指頭に指す亡き人の数や螢火や

とはるか昔の父が、故友が胸中に去来し、秩父へ行けば戦時の疎開の頃が、夏芝に坐せば生地アトナの厦門アモイのことが回

想句となり、常に前を向いて目と足で作ってきた草田男に、頭の中で、机上で作る句が多くなってくる。さらに、

高み低みへ青蜥蜴走せし代はよかりし
緑蔭賞美のをみなとおうなありにしよ

句型も過去形のものが見えてきて過ぎし日々を懐しむ老いの特質もあきらかになってくる。

しかしまた、冒頭にあげた静塔氏のいう老いのプラス面ともいえる感情の濃やかな句、

惜命ならぬ惜名や散る山ざくら
飛燕の下空に文字書き思ひ出しぬ
夫婦箸の在り処おぼろや桜鯛
初花や生きたしそして生かせたし

などもあってほっとさせられつつも、第一句の単に命の長らえを希うのではないという思い、第四句のなお生きて自分に与えられた詩人としてのつとめを生かしたいという思いの句など最後まで草田男らしい。

もう少し生かして老いの価値にさらに草田男らしいものがプラスされた句をみせて欲しかったという気がしないわけではない。しかし、

紫雲英ゆらぐ常に序幕であるを許せ

と詠った草田男らしく、常に途上にあるままに終ったのも不世出の俳詩人らしいという思いもまた禁じ得ない。